

「なんだかんだ、サラダが一番おいしかったね」。テーブルには、あなたが時間と手間をかけて作ったビーツや、油の温度や揚げるタイミングにとっても気をつかったエビフライなどが並んでいる。その中で真っ先に、生の野菜を切っただけのサラダを褒められたとして、なんだかむずがゆい気持ちにならないだろうか。

鋭い観察眼をお持ちですね。こういう仕事をしていると、そう言われることがしばしばある。相手はきつと、褒め言葉として使ってくださいているのだから、この言葉をかけられるたびに、私は、サラダがおいしいと言われたような気持ちになってしまうのだ。

「鋭い観察眼」なんて、この世界で生きている誰もが持ち合わせているものだ。電車の中の会話とか、けっこう聞いちゃったりするほつですか、と、質問が続くこともあるが、わりと誰もが「けっこう聞いちゃったりする」はずだ。

ちなみに、類語として、「瑞々しい感性」と「自分の若いころを思い出して胸にグッときました」がある。この三つがピンゴの如く揃ってしまう場面もあり、そんなときは、自分の力不足を思い知る。

私は、二十歳で本を出してからと



直木賞を受賞した朝井リョウさんの『何者』(新潮社)。就職活動に追われる大学生を描いた

寄稿 朝井リョウ

『何者』で直木賞受賞



『何者』で第148回直木賞の受賞が決まり、喜びを語る朝井リョウさん。1月16日夜、東京・丸の内東京会館

あさい・りょう 平成元年、岐阜県生まれ。23歳。早稲田大学在学中の21年、『桐島、部活やめるってよ』で小説すばる新人賞を受賞し、作家デビュー。同作は映画化され、昨夏公開された。今年1月16日に行われた第148回直木賞の選考会で、戦後最年少、男性最年少、平成生まれで初の受賞が決定。受賞作の『何者』では、ツイッターを効果的に使うなど現代的な手法で就職活動に追われる大学生の日々を描いた。著書に『星やどりの声』『もういちど生まれる』など。

どきどきいっと最大限に広げ

いうもの、ひたすらその「若さ」について言及されてきた。若い、ということで、はじめからハードルを下げられた状態で評価をされてきたと思う。一言でいうと、甘やかされてきた。「すごい観察眼」は、全員が持っている。「瑞々しい感性」は、そうラベルを貼ってしまえば、なんでもそう見えてきてしまう魔法の言葉だ。「若いころを思い出して胸にグッとくる」のは、つまり、全員がかつてはその「若さ」の中にいて、私がいま偶然、その真っ只中にいるというだけのことだ。つまり、「朝井リョウの小説」そのものではなく、「若い作家」という概念のよなもの、ちやほやされてきただけなのだ。私はこれまで、どこかの

誰かが無農薬で育ててくれた新鮮な野菜を、ただぎくぎくと切って両手で差し出し続けていた。そのうえで、「若いのに包丁を使えてえらいね」あらまあ洗い物もするの、えらいね、と、持ち上げられていただけなのである。

私は、特別なことはできない。どんな部位にも化けることができる細胞を発見することもできないし、画期的なダイエット方法を見つけてD

VDにまとめることもできない。電車で他人の会話を聞いたり、忘れたくないことをメモしておいたり、誰もができることばかりしている。「誰もができること」、その中で、「自分ができること」を最大限に広げ続けていくことしか、私に残された道はない。

鋭い観察眼。瑞々しい感性。自分の若いころを思い出して胸がぎゅんとなりました。もちろん、共感して読んでいただけることはとても嬉しい。だけどそろそろ、この言葉たちからも卒業しなければいけない。今いる場所からもう一歩踏み出せるように、自分のできる「最大限」をもっともっと広げていかなければならないと感じている。

芸文